

アレキサンダー・フォン・フンボルト

—主として「自然の景観」をめぐって—

馬場 喜敬

(平成6年9月30日受理)

Essay on Alexander von Humboldt

Yoshiyuki BABA

(Received September 30, 1994)

1. (序章)

アレキサンダー・フォン・フンボルト Alexander von Humboldt (1769-1859) は、かの浩瀚な主著「コスモス」(全5巻) *Kosmos, in 5 Bände* によってよく知られているが、かれ自身が主著よりも *Lieblingswerk* (寵愛の書) とよぶところの著作がある。「自然の景観」* *Ansichten der Natur* である。これは以下の7篇を収めている。

草原と砂漠について

Über die Steppen und Wüsten

アトレスとマイブレス付近のオリノコ河の滝について

Über die Wasserfälle des Orinoco bei Atures und Maipures

原始林での夜間の動物の生活

Das nächtliche Tierleben im Urwald

植物観相学構想

Ideen zu einer Physiognomik der Gewächse

諸地域での火山の構造と作用

Über den Bau und die Wirkungsart der Vulkane in den verschiedenen Erdstrichen

生命力、或いはロドス島の精霊

Die Lebeskraft, oder der rhodische Genius

カクサマルカの高地、インカ：アタフアルベの古い居住都市、アンデス山系の尾根からみた南海(南太平洋)の最初の展望

Das Hochland von Caxamarca, der alte Residenzstadt des Inka Atahualpa. Erster

教養部・哲学第一研究室

Anblick der Südsee von dem Rücken der Andeskette

* *Ansichten der Natur* に未だ自然の「景観」という定訳があるわけではない。邦語の研究論文の中には、自然の「光景」、自然の「諸相」、自然の「様相」、自然の「見方」、自然の「観想」、自然の「相貌」などが散見される。邦訳刊行を控えた著者には、いかなる語が最も適切であるかの決定が迫られているが、これには全篇を丹念に見直すことが役立つものと考えている。

「自然の景観」は7篇から成る、といったが、最初からこの形で出版されたのではない。第1版(1808)は僅か3篇のみ、第2版(1826)で5篇、第3版(1849)で現行の形となる。以下、経過を略記

第1版(1808)

Ansichten der Natur mit wissenschaftlichen Erläuterungen Erster Band (J.G.Cotta) Tübingen, 1808 VIII u. 334 S.

1. Über die Steppen u. Wüsten S.1-155 (50 Anmerkungen)

2. Ideen zu einer Physiognomik der Gewächse S.157-278 (36 Anm.)

3. Über die Wasserfälle des Orinoco. S.281-334 (7 Anm.)

第2版(1826)

Ansichten der Natur mit wiss. Erläut., Zweite

verbesserte u. vermehrte Ausgabe. Zwei Bände. (J.G.Cotta) Stuttgart u. Tübingen. 1826 Bd I : vl.u 234S. Bd. II : 200S.

Erster Band

1. Über die Steppen u. Wüsten S.1 - 180 (50Anm.)

2. Über die Wasserfälle ...S.181-234 (6Anm.)

Zweite Band

3. Ideen zu einer Physiognomik der Gewächse S.1-125 (36Anm.)

4. Über den Bau u. Wirkungsart der Vulcane S.125-186 (2 Anm.)

5. Die Lebenskraft oder der rhodische Genius (Aus der Horen Jahrg. 1795. 4tes Stück, S.187 -200Anm. なし

第2版にはそのための Vorrede は特になし。(第1版には<第1版への序文>付き。)序文は1849年(第2・第3版への序文)として、はじめて付される。2巻に分けられて出版された第2版に、4), 5)のエッセイが加わったことになる。

第3版(1849)

Ansichten der Natur, mit wiss. Erläut. Dritte verbesserte u. vermehrte Ausgabe. 2 Bände (J.G.Cotta) . Stuttgart u. Tübingen, 1849. Bd I : XVIII u. 362 S, Bd. II : 407 S. Das Hochland von Caxamarca...が第2巻の末尾に新たに加わる。

なお、<第2・第3版への序文>がこの版で付けられた(前記)。

以上の如くであるが、ここに掲げた Original 版が簡単に入手できるというものではない。むしろ反対である。とくに第1版は困難な状況であるらしい。いま私が本稿に活用しているのは次の2点である。

① Alexander von Humboldt : Ansichten der Natur (Reclam, 1969) , Hrsg. u. Nachwort von Adolf Meyer-Abich

② A.v.Humboldt : Ansichten der Natur. Erster u. Zweiter Band. Hrsg. u. kommentiert von Hanno Beck (Darmstadt ; Wissenschaftler Buch-Gesellschaft. 1987)

Meyer-Abich の Reclam 版は全173頁(うち Nachwort S.147-168)ということもあって、Original 版にある Erläuterungen と Zusätze を割愛している。「後記」は短いが要領のよいフンボルト論。また Inhaltsübersicht (S.168-173)を付す。各エッセイに段落をつけ、その要点を抽出しており、一つの解釈を示す。

Hanno Beck 版はこれに遅れること18年、1987、A.v.Humboldt Studienausgabe in 7 Bde の Bd. 5であるが刊行順としては最初のもの。他は以下の如し。

Bd. 1 Schriften zur Geographie der Pflanzen

Bd. 2 Die Forschungsreise in den Tropen Amerikas

Bd. 3 Cuba-Werk

Bd. 4 Mexico-Werk

Bd. 6 Sckhriften zur Physikalischen Geographie

Bd. 7 Kosmos

現在、Bd. 2のみ未刊。

主著 Kosmos は Original では5巻であったが、Bd. 7, Teilband 1. Teilband 2 の2巻に収められた(1993)。

なおこれに先立ち Hanno Beck は Original を再構成した。453頁の「A.v.Humboldt. "Kosmos" für die Gegenwart, bearbeitet von Hanno Beck」. 1978を公刊している。

代表的哲学者、文人(Kant, Hegel, また Goethe などはいうまでもなく、Fichte, Lessing, Schiller, Wilhelm von Humboldt, Heine, Schlegel など)の全集・著作集が、とくに60年代以降、続々と刊行されていったにもかかわらず、仲々日の目を見なかった A.v.Humboldt が遅ればせながら、上記②の形で整ったことは、Ansichten der Natur を、全作品に照らして読み解く上で大いに役立つものとなった。

第1版-3篇のみ(1808)の時点で、フンボルトは序文に記す。「これらは広大な洋上、オリノコ河流域の森林、ヴェネゼラの大草原、ペルーとメキシコの山岳地帯の荒地」などの中で、「雄大な自然に直面し、自然が、その豊かさを以て、しかもなおかつ個々の形象を積み重

ねて把握するように仕向ける力に促され、その場その場で書き下ろした」もので、初めから一書の各章を旨としたものではなく、「それぞれが完結した全体であることが目指された」「読者にその悦びと楽しみが伝えられ分ちえられんことを！」という。

また結びは次の一節である。

「私は随所で、物理的な自然が人間性の道徳的な情調及び人間性の運命に及ぼしている恒久的な影響について述べた。これらの頁はとりわけ心の行き詰った人々に献げられている。〈嵐のような人生の大波から己れを救い出そうとする者〉は、私のあとについて、森の茂みのなかへ、見渡しがたい大草原の果てまで、またアンデス山系の高い峰々へと好んで来るであろう。こうした者には世界を調整するコーラスが語りかける。

山々の上に自由がある！ 地下納骨堂の氣息は
清い大気のある高みへは昇って来ない。
世界はあらゆるところで完全である。
人間がそこへ苦しみを携えて行かないならば。」*

*ここに引用された詩はシラーの「メッシーナの花嫁」からのものである。ゲーテとの精神的親縁性 Geistesverwandschaft が強調される A.v.フンボルトであるが、1808年、かれはシラーにも挨拶を送っている。「第2・第3版への序文」にあるように、アレキサンダーは、シラー主宰の文芸誌「Horen」にかの「生命力」を載せてもらっている（1794年）。しかしその後シラーのアレキサンダー評は芳しいものではなくてゆく。（アレキサンダー・フンボルトとゲーテ・シラー、それに兄ヴィルヘルム・フンボルトを加えた4者関係は別に触れたい）ともかくこの時点では、かのゲーテの Chorus Mysticus はまだ語られていない。この Faust, Zweiter Teil 末尾の8行詩が衆目にふれるのは1832年以後である。アレキサンダーがここでうたいたいかったのは、Himmel（天国）への救済ではなく、Himmel（蒼穹）をもその一部とする広大な自然の中での救済感であったであろう。ゲーテの詩でいえば、Faust, Zweiter Teil 冒頭の Anmutige Gegend の境域であろうか。もっとも Faust をとりまく自然と、Alexander をとりまく自然は著しく違っている。

2.（7篇の概説）*

*7つのエッセイを一定の基準によって概説することは各篇の特色を捨象することになりかねない。私自身の、多少の Zusatz, Rezension などを加えることも起こりうる。

1) 草原と砂漠について

草原と砂漠についてのエッセイで、アンチル海灣の成立とヴァレンシア湖から始まる草原を関連させて述べられるとき、われわれは戸惑いを禁じえない。地史論的見方の違いがある。これは Meyer-Abich のいうように、人々は誰も〈時代の制約〉をもつ、ということで簡単に片付けておいて、「リヤノスの大草原」に急ごう。

「……………」

雲に隠されることなき太陽から降り注ぐ光線をうけ、炭化した草が朽ち果てて土となる。硬化した大地は強力な地震の衝撃によって揺るがされるように、ぽっかりと口をあける。それに対応して気流が旋回運動で自己調整しながら大地を撫でると平原はまことに珍しい眺めを提供する。尖った先で大地を掠めていく漏戸形の雲、砂粒子は蒸気状に電気を帯びた稀薄な空気の渦巻の中心を上昇する。一種の竜巻である。麥藁色の薄光が荒涼たる平原に低い天窮としておおいかかる。狭められた地平線、霧に包まれたようにぼんやりとした大気圏に浮ぶ、熱い塵のような大地は、窒息させるほど大気の温度を増大させる。涼風に代って東風が、長い間熱せられた大地の上を吹き抜けると、新たな炎熱を引き起こすことになる。

漸次、黄色く変色した扇状葉椰子が蒸発を防いでいた水溜りが消滅する。鱉やボア（大蛇）が乾燥した赤色粘土のなか深く埋れてまどろんでいる。乾燥は死を予告している。それでもなお、渇きを癒そうとする者たちは曲線を描く光線の戯れのなかに、水鏡の幻覚をもって動く。馬や牛は昏い砂塵にとり囲まれ、飢えと烈しい渇きに不安にさらさせ、的もなく歩き廻る。牛は虚ろな渇きに不安にさらさせ、馬は長い首を風に向けて呻りながら、まだ完全には蒸発してはいないであろう汚い水溜りを探し当てようとする。

ラバは用心深く、且つより抜け目なく、別のやり方で渇きを鎮めることを求めた。球形で沢山の葉脈のついた植物すなわちサボテン Melonenkaktus は、その棘の

あるさや(総苞)の下に水分の多い髓芯を仕納いこんでいる。ラバは前足で棘を横へ打ち倒す。次いでラバは用心深く唇弁を近づけ、冷たいアザミ汁 Distelsaft を飲もうと試みる。しかしこの活力のある植物の泉から創出されるものは必ずしも危険のないものではない。屢々サボテンの棘によって蹄が麻痺してしまったラバがみかけられるのである。

燃えるような昼間の暑さのあと、等しい長さの夜の涼しさがやってくる。だが牛や馬は安らぎを楽しむことができない。大きな野ネズミが眠っている間に牛や馬から吸血鬼のように血を吸い取る。或いは背中中にしっかりと喰い下がる。そこで野ネズミたちは、蚊、ウマシラミバエなど一群の刺す習性をもつ昆虫たちがたかりついている化膿性の傷を掻き立てるのである。この時期、牛や馬の受難は絶大である。

「とうとう、長い乾燥のあとで、慈みの雨期が始まると突然草原の場面は変わる。それまで雲に隠されなかった蒼穹の深い碧さは淡い色となる。人々は夜、南十字星座の中に黒々とした空間を殆ど認めなくなる。マゼラン星雲の柔かな燐光の如き揺めきは消えてしまう。鷲座や蛇使座の、垂直に光を落とす星さえも、顛えるような小さな惑星はどの光でしか煌めいていない。南の方の個々の雲の塊りは、地平線上に垂直に立ち昇って、遠くの方の山々のように見える。霧が立ちこめるように、むっとする空気が増えてきて天頂をこえるようになる。生命を活気付けるであろう雨を、遠い雷鳴が告知している。

大地の表面が潤おわされるやいなや、香りのある草原は、Kyllingnien や多円錐花序の Paspalum, 多種多様な草々で覆われる。太陽の光で刺戟されて草のようなミモザ Mimoein は、頭を垂れてまどろむ葉を沢山伸ばす。そして昇りゆく太陽に挨拶している。頂度鳥たちの早朝の歌や、水草の水面に咲き出た花のように、馬や牛はいまや生の悦びを享受しつつ草を食んでいる。急に背高く伸びる葉は、美しい斑らのあるジャガーを隠す。ジャガーは安全な隠れ所待ち伏せながら、若干の跳躍の幅を前以て計りながら、アジアの虎の如く、前を通る諸動物を素速く捉える。

時々(と、原住民たちは語る)、沼地の岸边に明るく光る赤色粘土(ローム)が、ゆっくりと浮氷のように隆起するのが見られる。わさい泥火山 Schlammvulkan の爆発の際の、烈しい騒音を伴って、波立の大地は空中高く投げ出される。この光景に詳しい者はこの現象を避

ける。なぜなら巨大な海蛇、若しくは装甲した鱧が、最初の豪雨によって仮死から目ざまされて、地下から現われ出るからである。

「いまや漸次、平原の南を割る諸河川が増水する。アラウカ河 der Arauca, アプレイ河 der Apure, パヤラ河 der Payara など。かくして自然は、一年の初めの半分、水のない、塵っぽい大地の上で、渇きで糞れ果てた動物たちを両棲類として生きるよう強制する。草原の一部はいまやはかり知れない広さの内陸湖にみえる。母馬は仔馬を伴い、島形をして湖面の上に隆起している比較的高い砂洲に戻ってくる。一日一日、乾燥した空間は狭まってくる。牧草地の欠乏から押し合いひし合いしていた動物たちは何時間も泳ぎ廻っている。そして茶色の発酵した泥上の中に出て咲いている草の、僅かな円錐花序で体を養う。沢山の仔馬たちは溺れ死ぬ。また沢山の仔馬たちは鱧に捕まりギザギザのある〔鋸歯状の〕尾でめった打ちにされて砕かれ、嘔みこまれてしまう。」

乾濕の交替。循環する草原、それは従来の草原の概念では包み込まれない現象にみちみちていた。

1799年7月16日、クマナ Cumana 到着から始まるアメリカ探検行(主として赤道地域)(1799-1804)*の初期の体験に基づくであろうこのリヤノス Llanos の記述には(それはまだ続くのであるが)、記述対象世界のなかに佇むフンボルトの姿もまた、私の前に映し出されてくる。

*Ansichten der Natur の以下の諸篇(「生命力」を除いて)もこの旅行と密接な関係があるので、大略を記す。(A.Meyer.Abich : A.v.Humboldt, 1967, S68.による)

Alexander von Humbolts Reiseweg in Amerika (1779-1804)

Juli 1799 Ankunft in Cumana (Venezuela)
Künstenwanderung bis Caracas

März 1800 bis Juni 1800 Orinokofahrt
November 1800

bis März 1801 Aufenthalt in Kuba
März bis September 1801

Reise auf dem Magdalenensturm
Aufenthalt in Bogota

Januar 1802

Ankunft in Quito, Juni Chimborazo besteigung, Oktober
Ankunft in Lima
Dezember 1802
Weiterreise nach Guayaquil
März 1803 Ankunft in Acapulco, Aufenthalt
in Mexiko bis März 1804
März 1804 bis April Aufenthalt in Kuba
Mai 1804 bis Juli in den Vereinigten
Staaten
August 1804 Ankunft in Bordeaux

フンボルトはここで *alles aneignende Natur* (あらゆるものを己れに適合させる自然) を実感する。しかし、*Natur* (自然) とは何か、牛や馬に運命への柔順さを与え、ラバに危険ではあるが飢えをしのぐ植物をあてがう自然とは何か、だがこの問いはフンボルトにはふさわしくない如くである。かれは限りない変様をもつ自然の姿そのものの記述を、別の語でよぶことを欲する。—*Naturgemälde* (自然画)。

そしてこの語、フンボルト独自の概念がまた、*Humboldt-Forscher* たちを悩ますことになる。同時代的にはシェリング *F.Schelling* にはじまり、今日に及んでいる。そうであればある程、この語・概念が生まれた現場へのおもいを新たにしておこう。

2) 原始林での夜間の動物の生活

本篇は10頁足らずの小文であるが、本題に合った記述は、後半も末尾に近くあらわれる。本論でも冒頭(序奏)は、民族・種族の感受性(自然感情)、生活様式と言語表現(発語)との関係についての一般的考察にあてられる。

この点に関し「補注」を加味して若干とり出してみる。「アラビヤやベルシャの平原・草原・砂漠(*Ebene, Steppe, Wüste*)など、労苦の多い遊牧生活は生活の便宜上、それらに数多くの名辞を作り出している。—多分20語以上は挙げられよう。……アラビヤ人は草原 *Steppe* (*tanufah*) や、水涸れした全くの裸地、砂利石に覆われている、また放牧地もまじっている荒地 *Wüste* (*shara, kafr, mikfar, tih, mehme*) を指す語をもっている。また、*sahl* は低地としての平原

Ebene, dakkah は荒れた高原 *Hochebene* である。ベルシャ〔語〕では *beyaban* は不毛の砂砂漠 *Sandwüste* (モンゴルのゴビ *gobi*, シナのハン・ハイ *han-hai* やシャー・モ *scha-mo* の如し), *yaila* は灌木よりも多い草で覆われた草原 *Steppe* (モンゴルの *küdah*・トルコの *tala* または *tschol*, シナの *huang* の如し), *deschti-reft* は裸地の高原 *Hochebene* である。

「古代カスティリーヤ地方(スペイン北部)の方言にみられる多くの山岳観相学的表現も目を瞠らせる。以下の如く多いが、そのうちの一つは、遠方の岩石の実体をも言い当てているものとして使われているということである。

pico, picacho, mogote, cucurucho, espigon loma, fendida, mesa, panecillo, farallon, lablon, penâ, peñon, penasco, peñolera, rocapartida, laxa cerro, sierra, serrania, cordillera monte, montaña, montañuela, cadenade montes, los altos, malpais, reventazon, bufa etc.

さて本題に入るとして“*Urwald*”とは何かがすぐに問題となる。人跡未踏ということであれば、寒帯の森林もこれにあてはまる。フンボルトは端的にここでは熱帯雨林 *Hyläa* のことなりとする。そして以下の記述となる。

「サンタ・バルバラ・ド・アリチュナ布教区。われわれはいつものように、アブレ河辺の砂漠で一夜を明かした。砂原は光を通さぬ森林に面している。われわれは火を起すため、乾いた木を苦労して見付けてきた。野営にはジャガーの攻撃に備えて、火で取り囲む必要がある。夜は温和な湿り気もち、月明りがあった。何尾かの鱉が河岸に近付いてきた。私はザリガニや他の水棲動物と同様、火の灯りが鱉をもおびき寄せたのに気付いた。われわれの舟の漕手は用心深く舟底に身をかがめハンモックを固定した。深い静止が支配していた。時々淡水イルカ *Sißwasser Delphine* の呻り聲が聴かれた。これはオリノコ河川網特産のものである。イルカは長列をなして次々と現われた。

「11時すぎ。その後夜通し誰もが睡眠を断念しなければならぬ騒ぎが起きた。野生の動物の叫び声が森

中に鳴り響いた。時を同じくして聞え始めた沢山の声のなかで、インディアンたちは短い間をおいて個々に聞かれた唯だ一つの声にだけ注意していた。それはホエザル Aluaten (Brüllaffen) の、単調な悲し気に呻る叫び声であった。[われわれは聞いた] 小さなオマキザル(?) (Sapajour) の、シクシク泣くような、フルートの微かな音のような声。縞のある夜猿 Nachtaffen (Nyctipithecus frivirgatus) の喉を顫わせるような低い呻り声。大きな虎、クガー Cugar, 或いはまだ知られていないアメリカライオン Percari, ナマケモノ Faultier などの沈み込むような叫び声。パバガイ Papagei, バラクヴァ Parraqua (Ortaliden) や他のキジ(ヤマバト) など一群の鳥たちの叫び声。虎たちが森の縁に近付いてくると、休みなく吠えていたわれわれの犬は呻きながらハンモックの下に隠れ所を探した。時々虎の声が樹の高みから降りてきた。これには猿の訴えるような笛の音のような声が伴った。猿たちは平常とは違う虎どもの追跡から逃げる策を探していたのだ。

インディアンたちは、何故或る決まった夜にかくも長き騒擾が生ずるかという問いに、笑いながら答える、「虎は美しい月明りを欣ぶ。かれらは満月を祝っている。」私には偶然に生ずる高揚した動物間闘争とおもえる。ジャガーはヘソブタやバク Tapir を追う。逃走するかれらは身をすり寄せて逃走を妨げる樹木のような灌木の茂みをも切り拓く。ジャガーに恐れをなして樹梢から下りた猿たちは叫び、騒音を一層ひどくする。これで目覚めた鳥たちの愕きの声加重される。このように漸次全動物界が興奮してくるのだ。私には必ずしもいつも、森の安らぎを乱す<祝われる月明り>があるとは思えない。激しい豪雨の際、或いは雷鳴轟き、稲妻が走って、森の内部を明るく照らし出すときに、動物たちの叫び声の騒々しさは極めて大なるものになることを経験しているからである。

フランススコ会修道士、アトレスとマイプレシスから、ネグロ河のサン・カルロスまで、奔流を通して、ブラジルの国境までわれわれに随いてきてくれたかれがこう打ち明けた。「自分は夜が始まりかけた頃、嵐を怖れた。そして祈った。天よ、われらにも、森の野生の動物たちにも、安らぎの夜を与えたまえ!と。」かれは私と同じ経験をしていたのだ。

さて、「熱帯の尋常ならざる暑い日々、真昼を支配

しているかの驚くほどの静さ」と対照的な以上の情景のあとに、フンボルトはこの静さのシーンの一つを描く。バラガン河 Baraguan 近くのある場所、「いかなる微風も大地の塵のような砂を動かすことのない」静寂のシーンである。このようにして対照は一層鮮やかになる。

しかしフンボルトはこれをもって終らせるのではない。最後の一節が、ある交響曲作品が、それなくしてはやはり曲の完成度が損なわれるかのように奏でるところのピアノシモを以ておわる。

「しかし人々は、自然の見掛けの静さの中で、われわれのもとに届く極めて弱い調べをそっと聴き取る。人々は大地に近く、大気圏の下方の層にいる昆虫たちのはっきりしないざわめき。ブーンという翅音、しげき翅音を聴きとる。すべては活動的な有機的諸力の一つの世界を告示している。灌木の茂み、樹木の裂かれた樹皮のなか、膜翅目昆虫によって住みつかれたあちこちの大地のなかで、生命は聴きとれるように活動している。それは自然の沢山の声の一つの如く、敬虔な受容力のある人間の心情には聴き取りうるものなのである。

3) 植物観相学構想

Physiognomik (観相学) 構想が語られる本篇においても、長い「前奏」は万年雪の高地、大海、大気圏、そして地下に遍在している生命譜である。

例えば、高地ではペルーのコルディレンレ山脈の尾根、レマン湖の南の白き峰(モンブラン)、チンボラツオ山(エクアドル)があげられ、生命譜の方は、蝶やその他の有翅昆虫、コンドルやヴィキュナ(Vicuñas)〔アルプスカモシカの類似種〕が口をついて出る。微小な顕微鏡的生物の枚挙にもフンボルトは事欠かないし、大海、沼水の中にも多種多様な形態の動物を探し出す。

そして植物。フンボルトの植物に対する関心の度合は動物に向けられたときより、はるかに熱がこもり、繊細さが発揮されるように感じられる。植物こそは動物以上に地球の各地域において、その独自の自然性格を、気候 Klimat が示す特色と相俟って、われわれの感受性に強く印象づけるものである。だからこそ動物観相学構想は育ちにくい、植物観相学への誘いはつる。

「有機的組織体の最深の力は、個々の部分の異常な展

開にみられるある一定の恣意性にもかかわらず、すべての動物的・植物的形態を、確固とした永遠に繰返される型 Typen に繋ぎとめている。

「人々が、個々の有機的存在物 Wesen に、ある一定の Physiognomie (自然観相) を認識するのと同じく、記述的植物学及び動物学 die beschreibende Botanik u. Zoologie は、語の狭い意味において、動物形式及び植物形式の分析である。かくしてどの地域にももっぱらそれ独自の Naturphysiognomie (自然観相) が存在する。

「たとえ種々なる地域の性格が、すべての外的現象に同時に左右されているとしても、(すなわち) 山脈の輪廓、植物及び動物の Physiognomie (自然観相)、空の青さ、雲の形態、大気圏の透明さなどが、全体的印象を惹き起すとしても、この印象の主たる規定者は植物相 Pflanzendecke であることは否定されるべきでない。動物(的有機体)には集落 Masse が欠けている。個体の移動性や屢々個体の小さいことが、かれらをわれわれの視野から遠のける。植物群 Pflanzenschöpfung は、これに反し、変らない一定の大きさによって、われわれの想像力にはたらきかける。その集落はその年齢をあらわす。植物においてのみ、年齢と、つねに自己を更新する力の表現は一對をなしている。—私がカナリヤ諸島で見た直径16尺 Schuk の巨木、竜血樹 Drachenbaum は、なおいつまでも(いわば永遠の若さで)花と実をつけている。熱帯では Hymenäen や Cäsalpinien の森はひょっとしたら一世紀以上の記念碑である。

「われわれがすでに植物標本館に納めえた8万種をこえる種々なる顕花植物を一瞥によって把握するならば、この驚くべき多数のなかに、多くの他の形式がそれに帰せられる主要形式 Hauptform を認識するだろう。その型の個体的な美しさ、配置、群化などに、ある土地の植物の観相は依存している。その型を規定するためには、最小の繁殖器官である花被や果実に基づいてではなく、集落によって地域の全体的印象を個性的に表わしているものに配慮しなければならない。

植物の主要形式の中には、いわゆる自然体系の全部の科 Familien がある。バナナ科植物 Bananengewächse, ヤシ Palmen, モクマオウ Kasuarineen, 毬果植物(松柏類) Koniferen は夫々個別の科としても記載

されている。但し、植物体系家は観相家がどうしても相互に関連ありとして結びつけている植物群の多くを分離しているのである。

植物の主要形式に着目すること、すなわち Physiognomik der Gewächse の成立である。目下、16の植物形式 Pflanzenformen が自然観相 Physiognomie der Natur を規定している。その数は、フンボルトが新・旧両大陸の旅行、北緯60度から南緯12度という範囲において、観察し、考察してえた主要形式の数である。今後、新しい地域での植物種の発見によっては、当然その数は増えるであろう。

16型は以下の如くである。

- | | |
|-----------------------------|-------------|
| 1. Palmen | ヤシ |
| 2. Bananenformen | バナナ |
| 3. Malvazeen | ゼニアオイ |
| 4. Mimosen | ミモザ |
| 5. Erizeen | ハイデソウ |
| 6. Kaktusform | サボテン |
| 7. Orchideenform | ラン |
| 8. Kasuarinen | モクマオウ |
| 9. Nadelhölzen | 針葉樹(型) |
| 10. Pothos-und Aroideenform | ポトス、観葉植物(型) |
| 11. Lianen | つる植物型 |
| 12. Schlangpflanzen | 纏繞(てんじょう)植物 |
| 13. Aloëgewächse | アロエ |
| 14. Grasform | イネ |
| 15. Farren | シダ |
| 16. Liliengewächse | ユリ |
- Weidenform
 - Myrtengewächse
 - Melastomen
 - Lorbeerform
 - (無番号は Meyer - Abich [Reclam 版] の Inhaltübersicht により補ったもの)

「われわれはヤシ、すなわちすべての植物の形態のうち最も高貴なものから始める。何故なら、諸民族はつねに美の価値を植物形態に認めてきた。高くすんなりとした、輪状の木肌をした、時として棘のある幹は、輝きそ

びえ立つ、扇状ないし羽状の葉をつけている。葉はしばしば草のようにぎざぎざがついている。つるつるした幹は180フィートの高さに達する。

頭初の一節を読み始めると、早くもこの Physiognomik の独自の雰囲気の中に捲こまれているのを感じず。

異論は可能であろう。しかし学的証明の問題でないもの、詩であるものに反論は意味がない。つまりこれは dichterisch (詩作品的な) 領域なのである。

われわれの詩的想像力をも協同させつつ、第二型以降の世界を逍遙することは自由に許されている、といつてよかろう。

フンボルトも本篇の末尾に Naturgenuß (自然享受) という語を案出している。

4) 生命力、或いはロドス島の精霊

シラクサ(シシリー)島のポイキーレ〔柱廊〕を飾っていた数多くの絵画のうちの一つ、これが本論の対象となるが、その絵はロドス島からきた難破船の中から救出されたという来歴のあることが明らかになる。

さて、その絵はどういう絵であったか。―「この絵の前下方段には、若者と少女が密にぴったりと寄りそっている姿がみえる。二人は衣裳をまもっていない。形よく育っていたが、それでもブラクシテレスやアルカメネスの銅像で嘆賞されるような、すんなりとした細身の体格ではない。どちらかといえば骨の折れる仕事をしている痕跡をとどめている強壯な肢体のつくり、かれらの憧れや悲しみの人間的な表現、こうしたすべては、かれらから天上的なもの、神々に類似したものを取り去り、地上のふるさとに縛りつけているようにみえた。かれらの髪は樹葉や野の花で簡素に飾られていた。お互いに求め合って、二人は両腕を差し伸ばしていた。」

ところでこの絵は「ロドス島の精霊」と呼ばれた。「二人の真剣な悲しげな眼は、ある精霊の方へ向けられ、その精霊は明るい微光に包まれて二人の間に浮遊していた。一羽の蝶が精霊の肩の上にとまっており、右側には燃え上るタイマツをかざしていた。精霊の身体つきは子供っぽく、丸味があった。眼差しは天上的で、生き活きとしていた。そして尊大に若者と少女を自分の足下に見下ろしていた」からである。

ところで、本篇について、フンボルトは「生命力」という題を付する。何故か、その理由をフンボルトはエピカルムスに語らせるのである。

エピカルム Epicharmus. ピタゴラス派に属する哲学者。シラクサの辺鄙な地ティヘに住む。不断に、事物の自然と事物の諸力の探究に、すなわち植物や動物の生成、また大は天体が、小は雪片や雪粒がそれに従って球状になる調和的法則の探究に携わってきた。

状況は次の如くであった。

即座に、上記の絵の対応物と認められる一つの作品が、ロドス島からの船でシラクサに齎された。「それは同じ位の大きさのものであり、類似の彩色を示していた。ただ色の保存はこの方がよく保たれていた。精霊は同じように中央に位置し、しかし蝶の姿はなかった。項垂れた頭をし、火の消えたタイマツは大地の方に垂れていた。若者と少女の輪(一組)はさまざまな抱擁の姿をとって、いわば精霊の上にくずれ落ちていた。かれらの眼光は最早、どんよりとした服従的なものではなく、荒々しい解放の状態、長い間養われた憧憬の念の満足を告げ知らせるものであった。

この二つの絵が、僭主ディオニシウス Dionysius の命令でエピカルムスの前に並べられ、見解を求められた時、エピカルムスは力なく寝椅子に横たわっていた。しかしかれの眼はやがて輝きを帯び、弟子たちをよび集めると感動した声で話し始めた。

「お前たち、窓のカーテンを引き払ってくれ。私はもう一度、生命力に溢れ、活動に満ちた大地の光景を楽しみたい。60年の間、私は自然の内的な動輪について、素材の差異について考えてきた。今日初めて、ロドスの精霊は私にはっきりと見えている。もし性の違いが生きものを益し、生産的に互いに結合させるとすれば、有機的自然においては、生まな素材は、等しい衝動によって動かされるだろう。すでに幽暗な混沌においても物質は集積し且つ避散した。(すなわち)つねに友愛により、或いは敵意により、物質は引きつけ合い、また排斥し合ったのである。天上の火は金属のあとを追い、磁気は鉄に従う。摩擦で生じた電気は軽い素材を動かす。大地は大地へと混融する。食塩は海から凝固する。そしてスチブテリア(硫酸塩)の酸性の湿気は毛状塩鉱トリキティスと同様、メロスの粘土を好む。すべてのものが生命のない自然の中で自らの同類と一緒になるべく急ぐ。

「動物や植物体においては、上の同じ素材の混合は別の状態を招く。ここでは生命力が、有無をいわず、権利をもって現われ出る。その生命力は原子のデモクリトスの友愛性や敵意などには気をつかわない。それ〔生命力〕は、生命のない自然のなかでは永遠に逃げ去りゆく素材を結合する。そしてこの自然のなかで止むことなく探していたところのものを解き放つ。

「私のまわりにもつと近付いてくれ、諸君よ。そしてロドスの精霊のなかに、その若々しい強さの表現のなかに、肩の上の蝶のなかに、かれの眼の支配的の輝きの中に、生命力のシンボルさを認識せよ。どんなに生命力が有機的創造のいかなる萌芽をも精気づけているかを認識せよ。地上の諸原素は、精霊の足もとで、いわばそれらの固有の欲求に従うことを求めている。そしてお互いに混融しようと努めている。命令的に精霊はそれらの力を、高く揚げられた燃え上るタイマツで威嚇している。そしてそれらの力の古い権利をみとめず、それらの力を自らの法則に従うように強制している。

「僭主が私に解釈を求めた作品に眼を転じよう。これは死の像である。逆さまになったタイマツは火が消えてしまっている。若者の頭は垂れている。精神は他の領域に逃げ去っている。生命力は死滅している。さて、いま若者と少女は楽しげに手を差し出している。地上の素材が権利をおびる。足枷は解かれ、それらは荒々しく、長い間の不自由ののち、それらの共同の衝動に従う。死の日はかれらには婚礼の日となる。

「このように死せる物質は生命力*に鼓舞されて、数えきれぬ何世代もの間を通じて、経過してきた。そして同一の素材が、ひょっとしたら、ピュタゴラスの神的な精神をすっかり包み込んでいたかも知れない。同じ素材〔でつくられて〕以前にはみすぼらしい虫けらが、刹那的な享受というやり方で、自らの〔現〕存在を楽しんでいたかも知れない。

行け、ポリュクレス。そして僭主に言いなさい。君たちが聞いたことを。そしてお前たち、私の愛する者たちよ、オイリュフォモス、リュシシス、スコパス、もっと私の近くに来なさい。私は、弱まった生命力が、私の中においてもまた、地上の素材を最早長くは支配しないであろう、ということを感じている。それ〔素材〕は自らの自由を再び要求している。君たち、私をもう一度柱廊に連れて行っておくれ。そしてそこから開かれた岸辺へと。間もなく君たちは私の灰〔遺骨〕をあつめることに

なるだろう！

*Lebenskraft（生命力）は Vitalismus、Mechanismus という対立項を解くキーワードの一つでもあるが、思想史的な系譜を求めると、カント Kant の die lebendige Kraft (1749) にゆきつく。フンボルトとカントとの結びつきは、かれがカントの Physische Geographie (1794) と、Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels (1755) を愛読していたことを重くみる者もいる。しかし本篇にみる限り、この Lebenskraft はピタゴラス Pythagoras 的—オルフィック Orphic 的—インド的輪廻思想の方が底流によみとれるのではなからうか。

◎オリノコ河の滝 火山の構造と作用、カクサマルクの高地は、紙面の都合で割愛した。

3. (フンボルトと現代)

小論は、アレキサンダー・フォン・フンボルトが Lieblingwerk とよび、世評は主著 Kosmos の重要な補完作とみる Ansichten der Natur を、成立事情にも気を配りながら、またそこに創出されている Naturgemälde Naturgenuß はじめ、いくつかのフンボルトの概念を、成立の場において見届けようとしたものである。

フンボルトへの関心は近時、俄かに高まり、ゲーテと並んで“Lieblinge der Natur”（「自然の寵児」）*とよべる人物であった（Meyer-Abich, 前掲書）といわれるほどである。

*Lieblinge der Natur とは Kind des Geistes（精神の子）と対照をなす語であり、ゲーテ自ら自己評価に愛用した。一方、後者はシラー Schiller のことであり、シラーもまた、この二者が、人間の位階において対等であり、文学においても相並ぶ評価をうけるべきであるとの趣旨を闡明するために、かの Über die naive und sentimentale Dichtung を書いた。トマス・マン Th. Mann は、この論文はあらゆる他の論文を無用にしてしまうほどの意義

があるという（「ゲーテとトルストイ」－人間性のための諸断章－1922）。以上は、前出の四者関係に多少ふれるものであるが、本稿ではこの問題にはこの程度にとどめる。

同時にフンボルトの全体像はまだよくみえてこないし、何よりも現代はそのコスモス・イデーになじめない状況にさしかかっている。

しかしながらまた、一見そのように見える反面、例えばわれわれが今日、「地球は生きた有機体的存在である。ガイア（新しい意味での）としての存在である」と感知し、認識にも至ろうとしている場合、その知的・精神的伝統・系譜を遡っていくと、そこには A.v. Humboldt の姿があり、かれとの愛すべき精神的親縁性が感じられるのである。